

山崎郷土叢

NO. 138

令和4.2.20

山崎郷土研究会
兵庫県宍粟市山崎町

大谷司郎

安田青風と山崎(一)

はじめに

私は昭和四十四年に山崎町役場に奉職し、教育委員会に配属された。当時の庄和夫教育長のもとへ山崎新聞の編集長をされていた小田静さんが時々訪ねて来られていた。取材という風でもなく世間話をされていたことが記憶に残っている。その当時事務所で山崎新聞を購読しており、綴じていたものが今に残されている一部となっていることに、時の流れの偶然を感じている。

山崎居住までの略歴

安田喜一郎(青風)は明治二十八年(一八九五)三月に揖保郡石海村(現太子町)吉福で生まれ、姫路師範学校を卒業して、飾磨郡揖保郡の小学校に勤め、一時朝鮮の学校を経て帰国し、龍野中学校へ赴任の後、大正十四年(一九二五)に山崎高等女学校へ転任してきた。青風は若くして詩文にすぐれた才能を発揮し、特に短歌の研究と作歌・普及を精力的に進めた。山崎町に在住した十二年間には

大谷司郎

目次

安田青風と山崎(一)	大谷司郎	1
山崎の芸術の流れ(四) 蒔絵	伊藤一郎	7
三木露風 露風と母かたのこと②	竹内克司	9
木村宗三の幕末から維新の活躍について	高井淳	13
ここまでわかった木村宗三	片山昭悟	17
会員・家族の文芸		24
事務局だより・編集後記		25

山崎高女に草の実会を結成したり、水甕山崎支社もつくり、また歌壇をまとめた「山崎歌話会」を創めるなど、短歌の一大隆盛期を築いた第一人者である。

山崎歌壇の隆盛期

山崎には江戸時代から武家や商家の間で歌壇、俳壇の盛行が見られる。明治を迎えても継続され、大正に入ると、多くの青年たちが新風を求めて短歌の世界へ入り、歌誌『薔薇』(大正三年)や文芸雑誌『不死鳥』(大正十五年)などを発行した。もともと文芸活動が盛んな山崎へ青風を迎えたことにより、昭和初期においても益々の隆盛を見せた。

昭和三年(一九二八)青風は水甕社に入り、より一層短歌熱が高まってきたようで、翌年の一月には当時山崎高女の校長奥村奥右衛門とともに「水甕山崎支社」を結成した。社友は三〇人で県下最大の支社となった。青風の住居を竹林荘と名付け『竹林荘通信』を発

安田春風の事跡(1)

西暦年	和歴	年	月	日	事項	年齢	出典
1895	明治	28	3	8	揖保郡石海村(現太子町)吉福で安田甚吉長男として出生。母はとく。弟妹各1人あり。		菖蒲湯
1909	明治	42	7		揖保郡御津小学校准訓導を拜命。受持の4年生には14歳、高等科には17歳の児童がいた。	14	菖蒲湯
1911	明治	44	4		姫路師範に入学。師範在学中は弁論部の理事、「文會」の編輯、音楽部の役員等を勤める。最も深く感化を受けたのは三浦修吾、真能義彦両先生である。	16	菖蒲湯
1913	大正	2			この頃から「青風」と号す。 上田秋影、田淵旗山氏らと『三味線草』を発行。現代詩文社に入り、服部嘉香先生に師事。井藤柚二、藤原逸宇、西角貞、藤井栄次郎、井沢笠山氏等と草野詩社を起し、『草野』を発行。 鷺城新聞に早乙女喜、仇木郎等のペンネームで詩歌を投稿。 歌集『囚人の秋』を千草書店から出版したのはこの年の秋である。服部先生の序歌「弟と呼ぶをば許せ君が歌わが歌よむと思ひつつ読む」の外3首。	18	菖蒲湯
1914	大正	3			現代詩文社が解散せられたので、白日社に転じ、前田夕暮先生に師事する。	19	菖蒲湯
1914	大正	3	10		山崎歌壇の薔薇会が短歌集『薔薇』を創刊する。		山崎町史
1915	大正	4	3		姫路師範を卒業。飾磨郡妻鹿尋常高等小学校に奉職。 この頃屢々大坂の歌会に出席し、清水白花、田村飛鳥、馬屋原雄風氏等と交わる。佐々木順、佐藤嘲花、阪口保等の名も忘れられない。 又同郷の先輩三木露風氏を初め山村暮鳥、室生犀星、萩原朔太郎の諸氏に引き立てられて詩を作り、三木氏の「未来」室生氏の「卓上噴水」等にも加名する。	20	菖蒲湯
1916	大正	5			石丸梧平先生を知り、雑誌『団欒』に執筆する。		
1916	大正	5	4		揖保郡御津尋常高等小学校に転じる。		
1916	大正	5	5	18	西山佐和乃(県立姫路高等女学校出身)と結婚。 山村暮鳥氏の詩に曰く「雲雀は麦の穂で目をついてなやみ、わが友は乙女の腕を食べはじめる」	21	菖蒲湯
1917	大正	6	3		長男章生(あやお)が生まれる。	22	
1919	大正	8			朝鮮公立小学校訓導に任ぜられ釜山に渡る。 山本秀雄、奥田富雄、森田梧郎、井上章等と親交。 LC「愛と創造」の会を作って盛んに活動。 波岡茂輝氏に浄土真宗の教を聴いたのもこの頃である。	24	菖蒲湯
1920	大正	9	10		次男邦生(くにお)が生まれる。	25	菖蒲湯
1920	大正	9	11		文検修身科に合格する。		
1921	大正	10	4		京城に転じたが、盲腸炎に冒されて二ヶ月余り総督府病院に呻吟。	26	菖蒲湯
1921	大正	10	9		県立龍野中学校教諭に任ぜられて帰国する。花田比露思先生の「あけび」に入る。		
1922	大正	11			顔面丹毒に罹ったが、漸く死を免れる。		菖蒲湯
1922	大正	11	11		三男愛生(よしお)が生まれる。 大阪の『潮光』に歌を発表。又土井暁雨、竹田砂丘氏等のいひほ会に入って俳句を作る。 原田與一郎、片岡定一、片岡得之、八十川栄治、種谷利国、中原幸郎の諸氏と緑葉社を組織し、子供愛護デーを中心に大いに社会教化に努める。 野口雨情、藤井清水、権藤圓立、二階堂隆正氏等とこの頃知り合う。	27	菖蒲湯
1925	大正	14	4		県立山崎高等女学校へ転任する。	30	山崎新聞第748号
1925	大正	14			秋に中原竹鳳氏等と校内に草の実会を創立する。 『ともしび』、『くさのみ』等を発行して今日に至っている。この会の為特に活動してくれた人々は、山下さと、千條小波、長田好子、富和ゆき、岸根光枝、内海孝、妹尾多嘉子、柴原アイ子、植田辰子、藤原フサ子、前田操、東谷富美子等数え切れないほどである。	30	菖蒲湯

安田春風の事跡(2)

西暦年	和歴	年	月	日	事項	年齢	出典
1925	大正	14	11		長女眞理子(まりこ)が生まれる。		
1926	大正	15	5		山崎歌壇の不死鳥社が雑誌『不死鳥』を創刊する。	31	山崎町史
1926	大正	15	11		公立高等女学校教諭に任ぜられ高等官七等を以て待遇せらる。		菖蒲湯
1927	昭和	2	2		従七位に叙せらる。		
1927	昭和	2	4		「生きて行く道」歌壇の選者となる。	32	草の実会第一詠草集
1927	昭和	2	12	1	『くさのみ』草の実会第一詠草集を発行する。		
1928	昭和	3	7		四男徹生(てつお)が生まれる。	33	菖蒲湯
1928	昭和	3	11		御大典記念賜餐の榮に浴し、大礼記念章を授けられる。奥村さき氏の紹介で水壺社に入り、石井直三郎先生の指導を受け、尾上柴舟博士を初め、上田英夫、金澤種美、兒山信一、松田常憲、山崎敏夫、奥村暢也、安部忠三、加藤増夫、加藤将之、野村完六、今井篤三郎、湯本喜作、谷口武彦、日比修平、甲斐水棹、日比野友子、丹草二、前原利男等の諸氏と知る。		
1929	昭和	4	1		山崎歌壇に「水壺山崎支社」を結成する。		山崎町史
1929	昭和	4	3		草の実第二詠草集を発行する(山崎高女校友会文学部)。編集者となる。	34	草の実第二詠草集
1929	昭和	4			住居を竹林荘と名付け『竹林荘通信』を第9号まで出す。		菖蒲湯
1929	昭和	4	5		高等官六等待遇、叙正七位。		
1929	昭和	4	6		天皇陛下関西行幸に際し拝謁を賜る。		
1929	昭和	4	10	13	水壺兵庫県大会が安田青風を中心にして山崎で開催される。		山崎新聞第734号
1930	昭和	5	1		歌人社を起し、短歌誌『歌人』を創刊する。『万葉歌人物語』を執筆、第15号で廃刊する。		菖蒲湯
1930	昭和	5			山崎に山脈詩社を結成。同人誌『山脈』を発刊する。	35	山崎町史
1931	昭和	6			水壺社刊行の『明治大正短歌研究』に「浅香社について」及び「古泉千樞論」を執筆する。	36	菖蒲湯
1932	昭和	7			山崎小唄できる。作詞野口雨情、作曲中山晋平	37	山崎郷土会報No.51
1932	昭和	7	3		歌人社を解散し、当時の歌人が結集して、山崎歌話会を結成する。		山崎町史
1932	昭和	7	4		歌集『春鳥』を水壺社から出版する。尾上博士の序歌「なつかしくひびくこゑかなかつてわがよしとよく見しその野山より」。その後出版祝賀会が山崎と明石で開かれ、権藤園立独唱、中村道之助伴奏の記念音楽会が龍野と山崎で催される。	37	菖蒲湯
1932	昭和	7	4		山崎郡是小唄を作る。		
1932	昭和	7	7		高等官五等待遇、従六位に叙せらる。この年、水壺山崎支社人生創造山崎支部、山脈詩社等の総合機関として山崎歌話会を創める。		
1932	昭和	7	9	1	山崎歌話会第一集『歌集 香魚集』を発行する。		歌集 香魚集
1932	昭和	7	9		山崎歌話会は『香魚集』を上梓後、『山崎景物歌集』、『宍粟名勝歌集』及び歌話会パンフレット教冊を今日まで刊行している。安井俊二、大井秀子、松本富治氏等の尽力に負うところ大である。		菖蒲湯
1933	昭和	8	8	15	『ししさわ』第1輯に「宍粟雑考」を寄稿する。宍粟郷土研究会の幹事となり、編集後記も記している。	38	ししさわ第1輯
1933	昭和	8			宍粟民謡が野口雨情作曲、中山晋平作詞で作られる。		広報しそNo.17
1933	昭和	8			『水壺』第20巻記念号に「山部赤人評伝」を執筆する。		菖蒲湯
1933	昭和	8	8		『旅百首』を上梓。更に『生きて行く道』投書家の選集パンフレットを企て、寺崎喜一氏著『雨』以後第8冊までを刊行。この年宍粟郡富栖小学校、飾磨郡苅野小学校、養父郡三谷小学校の校歌を作る。		菖蒲湯
1933	昭和	8	8		『旅百首』は同年5/28~6/3奈良、伊勢、名古屋、清水、日光、東京、田浦、鎌倉、江ノ島、石山をめぐる修学旅行の引率中の百首で、5/31上野駅にて野口雨情、石丸悟平夫妻の出迎えを受ける項がある。	38	旅百首
1933	昭和	8	10		『校旗』(学校教育精神作興週間記念歌集)を発行する。		校旗
1933	昭和	8	11		『山崎景物歌集』を発行する(編者安田青風、発行者安井俊二)。		山崎景物歌集

安田春風の事跡(3)

西暦年	和歴	年	月	日	事項	年齢	出典
1934	昭和	9	1		大正8年1月から同10年9月までの渡鮮中の百数十首を残していた歌集『朝鮮雑詠』を上梓する。		朝鮮雑詠
1934	昭和	9	1		山崎高女旧文芸部員有志が中心となって春鳥会を創立。同会から年末に、松井みさを遺詠集『萤火』を刊行する。		菖蒲湯
1934	昭和	9	2	20	『ししさわ』第2輯に「桓武伊和行」を寄稿する。		ししさわ第2輯
1934	昭和	9	7	15	『ししさわ』第3輯の巻頭言を記す。		ししさわ第3輯
1934	昭和	9	11		郷里に父を亡ふ。	39	菖蒲湯
1934	昭和	9	12	15	『ししさわ』第4輯に「掛保川」を寄稿する。		ししさわ第4輯
1935	昭和	10	2		『寂光集』を発行し、前年11月2日死去の父安田甚吉のことを妻佐和乃、子章生とともに記す。		寂光集
1935	昭和	10	3		『麗日集』を発行する(編集・発行者安田喜一郎 草の実会)。	40	麗日集
1935	昭和	10	6		妻佐和乃の歌集『鹿澤の家』を山崎歌話会パンフレット第3として発行する。		歌集鹿澤の家
1935	昭和	10	7	1	『ししさわ』第5輯の巻頭言を記す。		ししさわ第5輯
1935	昭和	10	10		水壺社刊行『明治大正短歌評釈』に「島木赤彦」を執筆。『生きて行く道』にも「短歌の門」を8月号から執筆。目下連載中である。		菖蒲湯
1936	昭和	11	2	22	山崎歌話会主催の青風初老祝賀会がマルシンクラブで開かれ、大阪朝日新聞記者坪田耕吉氏も出席する。草の実会も同日創立十周年記念会を催す。春鳥会は、第一詠草集『草に坐る』(前年)に次いで第二詠草集『竹の葉』を讀刊。会員数30余名、内海久美子氏が雑務を見ている。		
1936	昭和	11	3		篠陽女学校校歌を作る。	41	菖蒲湯
1936	昭和	11	4		長男章生の歌集『雪に描く』を上梓。山崎在住まに満11年。この間当地に迎え、或いは訪れてくれた主な文壇歌壇楽壇人は、藤井清水、権藤園立、石丸梧平、石井直三郎、兒山信一、金澤種美、吉澤義則、野口雨情、中山晋平、富田碎花、井上北魚、島関勇、藤井光澤子、山崎静子、永井瓢斎、坪田耕吉、小島清、木村栄次、木村五六、下村章雄、犬飼武、浦山貢、荒木良雄等の諸氏である。		
1936	昭和	11	5		安田青風初老記念として安田佐和乃編集兼発行者で、青風の初老までの略年譜や山崎歌話会員の祝歌を載せた『菖蒲湯』を発行する。		菖蒲湯
1936	昭和	11	7	1	『ししさわ』第6輯に「郷土の概念」を寄稿する。		ししさわ第6輯
1937	昭和	12			山崎歌和会、草の実会育ての親、安田青風先生大阪へ行かれる。	42	山崎郷土会報No.51
1946	昭和	21	11		長男章生とともに『白珠』を創刊する。	51	安田青風の人と作品
1947	昭和	22	1		安田章生歌集『茜雲』を発行する(文化昂揚社)。		茜雲
1947	昭和	22	4	10	安田青風著歌集『街空』を発行する(文化昂揚社)。	52	歌集 街空
1947	昭和	22			郷土研究会再発足する。志佐波第一号発行する。		山崎郷土会報No.52
1947	昭和	22			城原中学校校歌を作詞する(作曲は樋口昌道)。		
1947	昭和	22			神河中学校校歌を作詞する(作曲は秋月直胤)。		
1947	昭和	22			千種中学校校歌を作詞する(作曲は樋口昌道)。		
1948	昭和	23	4	1	山崎高等女学校は、私立篠陽裁縫女学校を合併し県立山崎高等学校と校名変更する。	53	創立百周年記念誌(山崎高校)
1949	昭和	24	5		『白珠第一歌集』発行する(選歌は安田父子が当たる)。	54	白珠第一歌集
1950	昭和	25	5		歌集『歲月』を発行する(白珠社)。	55	歌集 歲月
1952	昭和	27	7	10	神河中学校校歌発表会を行う(作詞安田青風、作曲秋月直胤)。	57	神河中学校同窓会名簿(昭和63年)
1953	昭和	28	5		城下小学校校歌を作詞する(作曲は樋口昌道)。	58	宍粟市教育委員会
1955	昭和	30	4	25	安田青風著歌集『季節』を発行する(東京創元社)。昭和24年から29年までの作品集。	60	歌集 季節
1964	昭和	39			歌集『遍歴者』を発行する(創元社)。	69	安田青風の人と作品
1965	昭和	40	2	10	「郷土史と人づくり」を寄稿する。		宍粟郷土研究会々報21号
1967	昭和	42	1		『白珠』20周年記念号を発行する。八谷正が「安田青風論」を発表する。	70	安田青風の人と作品

行し、同年十月には水甕兵庫県大会を山崎で開催するなど、当地の歌壇の最も華やかな時代で「山崎に入ると歌の匂いがする」とまでいわれた。

山崎新聞と文芸

平成三十年六月の六粟学講座でジャーナリストの高田智之氏が「露風も寄稿した山崎新聞とその時代」をテーマに講演をされた。その資料によると、山崎新聞が創刊されたのが大正四年（一九一五）八月で、発行部数約一二〇〇部、月三回発行されている。

昭和二年（一九二七）から一五〇回以上に亘り三木露風のエッセイや詩、俳句、短歌の寄稿が続いている。しかもその記事は第一面のトップに掲載されている。そして同一面には地元の詩歌や俳句、川柳なども載せられている。山崎新聞の特長として、文芸面に重きを置いた編集がされているといえる。見方を変えれば文芸に関心の高い読者がそれだけ多かったと推測できる。大正十四年（一九二五）に山崎高女に結成された草の実会詠草も随時に掲載されている。

青風と山崎新聞

青風に関する記事を山崎新聞で追うと、山崎へ赴任早々の大正十五年の五〇四号の「魂の会話」や五三五号の「我等如何に生くべき乎」をはじめ、短歌以外の寄稿も多く掲載されている。

① 青風を評価…… 中でも青風の活躍を評した記事があるのでここに上げたい。それは昭和五年（一九三〇）一月一日発行第七四三号に駒澤弧草が「芸術に生きる人々」と題した寄稿である（抜粋）。

「私等が誇りとするのは何と言っても歌人の安田青風先生である。先生は本当にかくれたる不遇の歌人である（失礼の様ですが）。

もつともつと先生の芸術を真事に知らしたい。先生は水甕の同人や二三の誌の選者をしてゐられる。私は今少し山崎の人々に芸術を知って欲しい。……先生程詩的感情を静かな気持ちで高調される人を余り見ない……この様な歌人を持った山崎歌壇は幸福であり、また教えられる処が多いにちがひない。」

山崎へ青風という素晴らしい歌人が来たことをもつと地元の人はずっと欲しい。片田舎に置いておくのは勿体ないくらい先生であり、山崎は先生を迎えて幸運である。きっと多くのことを教えられらるだろうと絶賛している。

② 青風の所見…… その記事の登載後、すぐの同月十一日発行第七四五号には「歌の追憶その外（一）」と題して青風が所見を載せている（抜粋）。

「私のことに就いてかなり多くの文字が費やされた上に、過分な讃辞さへ列ねられてあったので、何だか尻のくすぐったい思ひをしながら、私はあの文章を読んだ。……私は広い日本の歌壇に於けるほんの一兵卒であるに過ぎない。けれども、氏の文章を見て私は地方の文壇のことに對して、かかる周到な注意を向けてをらるる青年のあることを非常に心強く感じた。……今日の日本の社会に於いて、歌だの詩だのと一文にもならぬ仕事に血道をあげて騒いでゐる人間の存在してゐることは、すべてを物質価値に換算してみれば治まりのつかない多くの人々から見ても、全く奇蹟的な時代錯誤の現象たるを免れまい。……さういふ時代錯誤を、うら若い駒澤君に於いて発見するなどは確かに一つの現代的な憂鬱である。だがこの憂鬱こそはやがて次の時代を救う唯一の鍵となる

であらう。」

以下「歌の追憶その外」は同号から第七五二号までに六回にわたって青風の自伝を中心に掲載されている。短歌を始めたのが一六七歳の頃で一時期歌を離れ、また歌に戻り、朝鮮に渡った時盲腸炎を煩い、九死に一生を得て帰郷し、龍野中学校へ赴任したことや、山崎へ転居してきた経緯に触れ、その間日本文化の特長である短歌の重要性を語っている。

③ 龍野を去るにあたり…… その連載の中で龍野中学校から山崎高等女学校に転任した頃の記事が昭和五年（一九三〇）二月一日発行第七四八号と同月六日発行第七四九号にあるので紹介する。まず第七四八号では次のとおりである（抜粋）。

「大正十四年の春、私は山崎に来た。私が山崎に来たことは私の周囲、私の友人等にとっては全く意想外の事件であったらしい。けれども私には微かながらにも期するところがあつて来たのである。蟹はその甲羅に似せて穴を掘るといふ。諸君、私を見くびり給ふな。況して山崎をや。私は龍野を立つ告別式の日にずらりと列んだ中学生の前に立つて言った。「私は今、一人の樵夫が、先人未踏の処女林に入つて行く心待で山崎に行こうとしてゐる。私の心臓は、些しばかりの不安を交へながらなほ新しき仕事に対する熱と興味とに勇躍してゐる。諸君、私を信じてくれ給へ。」だが、これは何といけ若気の思ひ上がりであつたらう。朝暮な社会認識の不足であつたらう。……私が龍野で養ひえた僅かな信念も、水の中で握りしめた砂のやうにするすると指の間から抜け落ちてしまふのであつた。私は幾度か陥穽に落ちた。」

龍野中学校で山崎へ赴く抱負と信念を述べたが、山崎には山崎の文芸の高揚があつたことが判つたのだろう。

④ 山崎に赴任して…… 続いて第七四九号の記事からは山崎高女内にできた歌会「草の実会」が隆盛な活動を続けていることと、青風の教育論を記している（抜粋）。

「中原竹鳳君は「あけび」での知り合であつた。歌には怠り勝その頃の私ではあつたが、竹鳳君が山崎にゐられることは、唯一の心頼みであつた。山崎に来た年の十一月、学校内に草の実会を起した。これは主として竹鳳君の力によつた。この会は今日まで続いて、更に益々隆盛ならんとしてゐる。昭和二年から「年刊歌集」を出し又最近に「くさのみ」といふ小雑誌をも隔月に刊行するやうになつた。……教育の間口がいやに広くなつた、興行が少しもない、工場式多量生産主義によつて吐き出される現代の学校から、何んな人間が生まれて来るか、この事は機会があつたら、もつとゆつくり具体的に論じて見よう。……私たちの教育における、歌道の積極的な進出に疑問を抱かれる人あらば、いつでも来て話しあつてほしい。私は今日の日本の世相をつくづく静観して、寧ろ日本民族個有のこの芸術を把持し、発展せしめてゆくことの重大なる文化的意義を感じてゐる。」

今号では、紙面の都合上ここで一区切りとさせていただきます。なお、安田清風の事跡（表）を三頁にわたり紹介させていただいた。参考文献は出典欄に載せている。この多くは故稲村幸子氏のご息から市へ寄贈を受けた資料に拠るものである。

（つづく）

山崎の美術の流れ(四) 蒔絵

伊藤 一郎

蒔絵には、木地が必要です。まずは、木地師について報告します。

山崎町岸田在住の宇野正憲氏が、父正碓氏の集められた資料をまとめ、平成十九年に出版された「紙漉き人と木地師の技」によると、五十五代文徳天皇の第一皇子の惟喬親王が小椋太政大臣や堀川中納言らをともなつて、近江小椋郷に隠棲。ここで、轆轤の技術を教えられたという。それで木地師達は、木地師の祖と仰いでいる。近江では同職が多くなると良材を求めて諸国に分散して行った。近江から来た木地師達は、常に出身地小椋郷・小椋姓を誇りとしていた。宍粟市内でも、三方方面・波賀町北部・千種町北部・蔦沢北部に木地師の住居地があり、小椋姓を引き継いでいる。

木地師の製品が山崎町に集ってきたのは、『山崎町史』から推察すると、龍野城主木下勝俊(一五八四〜九一)山崎村に「新町を申し付け 他所より来たり候もの 諸役あるまじく候」と命令。勝俊の医師として山崎に来たのが、山崎闇斎の祖父浄泉です。慶長五年(一六〇〇)姫路藩主池田輝政による市日の制定は、まさしく楽市・楽座の出現で、山崎・山田両村が一筋の街並みとなり商工業者の住む町へと変貌した。元和三年(一六一七)に町庄屋制から町年寄役制となり、揖保川の高瀬舟も就航した。寛永十年(一六三三)には、山崎町・山田町・田町(山田)魚町(北魚町)富士野町・紺屋町・大雲寺町(寺町)・籠町(伊沢町)・佐用町(西町)・門前町・高

野町(福原町)の十一町が成立した。幕末の万延(一八六〇)には、山崎組と呼ぶ木地屋仲間が相当数居住と記載されています。

次に蒔絵ですが、司馬遼太郎の「北のまほろば」の一説に、青森県三内丸山遺跡より四五〇〇年前の巨木柱出土、板状の土偶も出てきて黒漆が塗られていた。縄文時代に、黒漆が利用されていたのだと感銘したことを思い出しました。『山崎町史』によると、室町時代に万里小路大納言領高家荘と六条家領柏野荘が記述されており、京都の漆文化も山崎に伝わったのではと思うのです。

私の妻の実家上ノ下内海家の蔵に眠っていた漆器の小皿には、昭和九年今宿高瀬作とあり、黒木皿には、山崎酒井源平と書いており、漆工芸等が盛んに行われていたと思われます。

県の林業試験場(今の文化会館の近く)には、木工製品や漆工芸などの技術研究がされており、塗装部にて絵付けの指導をされていたのが、武野金霞先生です。先生は、明治三十七年に京指物師の長男として誕生され、宮内庁御用達の蒔絵師吉田金年門下に入門されました。十年後、師匠より金霞の雅号を与えられ独立。太平洋戦争で負傷し、妻の郷里山崎町に來られました。

昭和三十八年に蒔絵師の仕事に専念。昭和三十九年には、伊藤親保、友澤露風らと共に山崎美術協会の発起人となり、昭和四十二年蒔絵教室「春霞会」を開催。当時の会場は、大雲寺でした。私の母も友人を誘って参加し、これがきっかけで日本画への道に進みました。

先生の次男武野恭永氏も指導に加わり、その後次女秋久鳳霞氏も参加し、地方の美術展に蒔絵作品が多数出品されました。先生は平

成十一年に亡くなられましたが、平成二十三年に孫を加えた武野金霞三代に亘る京蒔絵展が東京銀座の画廊にて開催されました。

私は、蒔絵独特の雅で繊細な作品の中に、先生の人柄から来るのだと思いますが、静寂で深みのある作品が大好きです。先生の燈された芸術を、後継ぎのお二人が継承されていることに敬意を表します。



武野金霞先生

武野金霞 略歴

- ・ 京都青年漆工部展二等賞二回授賞
- ・ 昭和四十二年 姫路市展市長賞
- ・ 昭和四十七年 「半どんの会」芸術賞
- ・ 昭和五十一年 山崎町文化功労章
- ・ 昭和六十一年 西播磨文化奨励賞
- ・ 平成二年 兵庫県ともしびの賞



蒔絵



蒔絵

三木露風 露風と母かたのいふ②

竹内克司

露風のその後

若くして文壇に名を挙げた露風であったが、詩作に行き詰まった。叙情や感覚からではなく内面の真の美の追求に苦悩し、そこから抜け出すため宗教的なものに救いを求める一時期があった。

・大正二年（一九一三）『白き手の狩人』を刊行。西洋の象徴詩に日本的な情趣を取り入れた独自の詩風を完成させた。

・大正三年（一九一四）栗山なかと結婚し、東京都池袋に住む。

・大正四年（一九一五）『幻の田園』、童謡集『真珠島』等刊行。

・同年 北海道トラピスト修道院（北斗市上磯町）を初めて訪問し、感激し、詩集『良心』を刊行した。

・大正九年（一九二〇）北海道トラピスト修道院の文学講師に招かれ、四年余り赴任した。

・大正十二年（一九二三）関東大地震起きる。その地震が起きる一か月前に、読売新聞に書いた詩の予言のために大地震が起きたのではないかと不安を抱え、親戚・友人の見舞いに上京するも、その惨状を目の当たりにして、大きなショックを受けノイローゼとなった。その時東京にいた母かたが北海道まで見舞いに駆けつけている。

・大正十五年（一九二六）五月から六月にかけて東北地方、十一月に四国地方の巡行の旅行にて、「宗教と文学」について講演をした。このときの旅先の紀行文「北日本の旅と自然と」、「四国地方旅と

自然と」及び随筆、教科書に掲載された詩文、詩歌等を『山崎新聞』に、昭和二年（一九二七）から二年半にわたり寄稿した。

名曲赤とんぼの作詞・作曲の経緯

赤とんぼの詩は露風が滞在したトラピスト修道院内で作られた。童謡赤とんぼについて、露風は「これは、私の小さい時のおもいでである。「赤とんぼ」を作ったのは大正十年（三十二歳の時）で、処は北海道函館付近のトラピスト修道院に於であった。或日午後四時頃に、窓の外を見て、ふと眼についたのは、赤とんぼであった。静かな空気と光の中に、竿の先に、じっと止まっているのであった。それが、かなり長い間、飛び去ろうとしない。私は、それを見ていた。後に、「赤とんぼ」を作ったので、ある関係のある『櫛の実』に発表した。」とある。この赤とんぼの風景は、すでに露風が十二歳のときに詠んだ俳句に、「赤蜻蛉 とまっているよ 竿の先」がある。

露風は故郷で見た同じ風景を、遠く離れた北海の地で見て、故郷を強く思い起こしたのである。

作曲家山田耕筈は明治四十三年（一九一〇）、ベルリン留学への出発前に友人から露風の詩集『廃園』を贈られた。耕筈はこの詩集を読み感動し、心を打たれた。露風の詩が音楽性に富んでいたことによるという。以後露風と交際が始まった。赤とんぼは最初童謡集『真珠島』に「赤蜻蛉」として収録されていたものを、ポケット版『小鳥の友』に句読点等が改められ「赤とんぼ」と題したものを、露風は親友の山田耕筈に贈った。昭和二年（一九二七）に名曲「赤

とんぼ」は耕筈により神奈川県茅ヶ崎から東京の通勤の汽車の中で作曲された。やがてレコード化され、徐々に知られるようになった。

露風の母かたの生い立ち

かたは明治五年（一八七二）、鳥取市で生まれた。父和田邦之助信且と母みねの二女として生まれた。父は因幡二十士事件に關与していたと藩主の嫌疑をうけ、蟄居という謹慎処分を受けていた中で誕生であり祝福されることはなく、和田家の重臣であった堀家の養女となり、堀正・千代夫婦に大切に養育された。廃藩後、東郷町松崎（湯梨浜町）に移り住んだ。かたには藤北きそという乳母がいた。堀正は高知監獄の天獄（刑務所長）の職を得て、堀家は高知県土佐に移り住むことになり、かたは高知の小学校に入学する。勉強は良くでき、飛び級で学年を進んでいる。晩年かたは「土佐の高知の播磨屋橋は我が第二の故郷なりけり」と詠んでいる。その後堀正は播磨龍野町に転勤する。その折りに、かたのことが三木制の目に留まり、堀正に息子節次郎の嫁にと所望した。堀正は長崎の転勤が決まるや、縁談を受け入れ、かたを龍野の円覚寺の住職の壘采教順・阿い夫妻の養女とし、かたの嫁入り修行を託している。

明治二十一年（一八八八）、かたは三木家の次男節次郎と結婚し



提供館城霞 碧川かた

た。節次郎二十二歳、かた十六歳、当主の制は元龍野脇坂藩寺社奉行、明治になり「第九十四国立銀行の頭取、初代龍野町長となる。妻はとし。節次郎・かた夫婦には長男操（露風）と次男勉が生まれた。

しかし夫の節次郎が家に帰らない放蕩の日々が続き、かたが思い詰めて義父制に相談すると、制はかたに自由に生きる道を促したという。元々節次郎は身のおさまらない性格で結婚により落ち着くことを期待していたものの、一向に変わらなかつた。これ以上かたに辛い思いをさせるのが不憫であったようである。義父への思いについて、かたが昭和三十六年（一九六一）に亡くなる一年前に詠んだ歌がある。

よき子供生まると言いし祖父君に聞かせたく思う赤とんぼのうた

操の誕生を最も祝ってくれた天国の義父への敬慕の思いが込められている。

※「因幡二十士事件」ペリー艦隊の来航以来、幕末の動乱が始まり、当初水戸学による尊王攘夷論が武士層に支持されていたが、幕府が単独で日米通商条約を締結したことにより、討幕を掲げる尊王攘夷派と幕府との関係を重視する佐幕派による対立が強まった。その国内の動きの縮図が鳥取藩の中に生まれた。嘉永四年（一八五〇）池田慶徳が十四歳で鳥取藩主に迎え入れられた。慶徳は水戸藩主徳川斉昭の子で幕府の十五代將軍徳川慶喜の兄であった。尊王攘夷の思想をもつ家柄であったのが、慶応二年（一八六六）弟慶喜が將軍になって、慶徳は尊王・敬慕という微妙な立場をとっていた。文久三年（一八六三）鳥取藩の急進尊王攘夷派の二十士が、藩が明確な態度をとらない元凶は藩主の側近（佐幕派）と断じ、京都の本圀寺で側近三名を殺害した。当時和田邦之助（二十四歳）は京都で尊王攘夷に勤め有志たちを指導していた。

かた実家の因幡鳥取に帰る

明治二十八年（一八九五）の早春、かたは操が幼稚園から帰るのを待たずして、勉を連れて三木家を去った。当時、因幡へは鉄道もバスもなく、人力車か徒歩で三日余りを要した。新宮町千本から相坂峠を越え佐用三日月、そうして北に向かって佐用町平福から釜坂峠を越え美作大原へそして西粟倉村坂根から国境の難所志戸坂峠を越えて智頭方面に至る。この因幡と美作を結ぶルートは智頭往来といい江戸時代より鳥取藩の参勤交代や旅人で賑わう街道であった。因幡側の急勾配の駒帰峠にある「泣き地藏」の前でかたは脇目もはばからず泣き伏したという。

自立を求めて看護婦に

かたは郷里に帰り実の父母に会ったあと、当時の職業婦人、看護婦（師）をめざして乳飲み子の勉とともに上京する決意をした。その上京の長旅に同行してくれた青年がいた。それは、東京専門学校（現早稲田大学）に進学し、夏休みに帰省していた碧川企救男であった。後にかたと結ばれる運命の出会いであった。

かたは、上京して養父母がいる小石川区表町の鳥取県出身者の学生寮・久松学舎を訪ね、堀夫妻に子供を預けた。

文京区の東京帝国大学病院付属看護婦養成所に入所した。養成期間は二年間、全寮制であった。昼は病院患者の付き添い、夜は授業の毎日、仕事が終われば小石川に授乳に走り、門限もままならない。勉学と育児の両立はあきらめ、勉を三木家に引き取ってもらうことになった。勉が去った寂しさからか、その後に基督教の洗礼を受け

た。その勉が結核で二十七歳の若さで亡くなったこともあり、かたの心の傷は生涯消えず、最期を看取った露風に毎年命日には供養の手紙を届けていた。

・明治三十六年（一九〇三）かたは碧川企救男と再婚する。かたは二ヶ年の修業を終え、正式に東大医学部付属病院看護婦となり七年勤めたとき、かたの勤勉さが認められ、ドイツ留学をすすめられたが、企救男の求婚があり、かたは結婚を選び北海道小樽に渡った。

その後、北海道から東京・京都と夫に伴い働きながら、苦しいやりくりの中で夫と子供のために尽くした。かたには一男、四女の子供が生まれた。かたは在学中に特別に習ったドイツ式マッサージが役にたった。東京に帰った後も訪問介護により生活を支えた。

・明治三十八年（一九〇五）露風から手紙が届いた。それは上京した露風が、母への想いと、困窮している生活の実情を訴えたものであった。かたは切り詰めた生活で、支援するお金もなく要望に応えることができなかった。「汝の頬を当てよ。妾はここにキスをせり」と書きしるし、その下に余白を残した。受け取った操は、その部分に顔を埋めて号泣したという。

・明治四十一年（一九〇八）碧川家は上京。この後露風は碧川家の理解を得て、勉共々訪れるようになった。

・明治末期から大正時代にかけてかたは婦人参政権運動、クリスチヤンとしての働き、禁酒運動など多方面の活躍をした。雑誌『女権』（昭和二年創刊）を発行し、婦人参政権・公民権の獲得・男女平等法制改革及び家庭平和向上を目的として編集した。さらに女権接護会を設立した。露風は『女権』創刊号に次の二首を寄せて母を応

援している。

あたたかき心をもてるたらちねの 母にはまことちからありけり
かぐわしき花にも似たるをみなにも ただしきちからあらまほし
けれ

・昭和三十七年（一九六二）一月 碧川かたが病床に付し、露風は
駆けつけ付きつきりで看病するも、同月八十九歳で永眠した。

吾れや七つ母と添い寝の夢や夢 十とせは情け知らずに過ぎぬ

この短歌は少年期のもので、露風少年の心の奥底には断ち切られ
た母との添い寝の願望があった。通夜の晩、露風は、特に願って亡
き母の傍に添い寝をする。長い年月をかけて、やっとこの想いを果
たすことができたのである。

そして、最後に露風は、母かたに愛をこめて詩を捧げた。

吾母よおんみは逝きませり その逝きますや いと安らか

天国に至ります げにその感あり

性篤実にして堅 健全なる思想を有し 女権擁護に尽くす

花に似たる詩歌を作り その資性を 我に思わしめたり

事終りたる如くにして 終わらず 此世にありても生ける如し

・昭和三十九年（一九六四）露風は住居していた東京都三鷹市内で
交通事故により亡くなった。露風七十六歳。母を見送った二年後の
ことであった。

終わりに

今回は露風のその後と母かたについてふれる中で、赤とんぼの作
詞と作曲の経緯、そして露風とかたの二人の絆に焦点を当てていま

した。

名曲「赤とんぼ」は、露風が北海道は函館湾の西にある修道院内
で、背後の山（丸山）の美しい夕日や赤とんぼと接したことから、
作詩し、親友山田耕柞が汽車の中で作曲したことを知りました。ま
た母かたの父に関わる事件、因幡二十士事件の翌日、京で政変があ
り、あと一日この決行が延びていればこの事件はなかったかと思わ
れます。不運にもかたは生まれてまもなく父母と別れ、かたと露風
はわずか五年の歳月での別れとなりました。別れの事由こそ違え母・
子の境遇がよく似ています。辛い運命を乗り越え、明治・大正・昭
和を懸命に生き、露風は詩壇に、かたは婦人運動家として世に花を
咲かせました。

露風は早熟の天才とされ、若くして文壇を離れたといわれますが、
露風の執筆意欲は生涯を通じて衰えることはなかったといえます。
『山崎新聞』の露風の寄稿文が近く公開されると思われます。これ
により今後の露風文学の研究の一助となることを願うとともに、N
HK朝ドラに碧川かたが取り上げられることを願うばかりです。



露風像

参考『露風と碧川カタ』、『露風の童謡』、
『「赤とんぼの母」碧川かた評伝集』、『梵
鐘は既に鳴れり 上・下』、『現代によ
みがえる三木露風と「山崎新聞」他

木村宗三の幕末から維新期の活躍について

高井 淳

はじめに

令和三年の大河ドラマは「青天を衝け」で、渋沢栄一の生涯が描かれました。その第二二回・二三回・二四回は、徳川昭武を將軍名代とするパリ万博（一八六七）への派遣使節団（註①）が描かれていました。その一行の中に、テレビでは登場していませんが播州山崎本多藩士の木村宗三（そうぞう、以後宗三と記す）がいたということです。事実であれば、日本の存続と方向性を決定する百五十年前の激動の時代の歴史が身近に感じられる情報です。その真実は今後の課題ですが、木村宗三を通して幕末という時代の事を考えてみたいと思います。



木村宗三（註②より）

一 幕末の藩士と洋学について

幕末の約十五年は大きな変化の時代でした。嘉永六年（一八五三）

ペリー来航以来、国論は攘夷か開国か、また尊皇か佐幕かで紛糾し、それまでほぼ鎖国状態の日本にとって大きな危機感が沸き起こり、それが結局、嘉永七年（一八五四）以後五ヶ国と和親条約、次いで安政五年（一八五八）六月から九月にかけて修好通商条約が結ばれました。そうになると、幕府としては実際に米・英・仏・露・蘭の各国とのやり取りの中で様々な約束事や書類の作成・翻訳などで、通詞や翻訳者、条約作成者の育成が急務となり、多くの人材を必要としました。そして日本の国防意識、つまり西洋式軍備の必要性も高まりました。（註③）天文方翻訳局の蕃書和解御用（ばんしよわげごよう、一八一一設立）を安政二年（一八五五）洋学所とし、翌年蕃書調所（ばんしよしらべしよ）と改名、蘭語だけでなく他の英・仏・独・露の外国語も教え、軍事科学技術・機械・物産の書等の翻訳も行いました。さらに文久二年（一八六二）洋書調所としたのち同三年「開物成務」からとって名前を開成所とし、天文学・地理学・究理学・数学・物産学・精錬学・器械学・画学・活字術等々の学問を学べるようにすると同時に、幕臣だけでなく陪臣にも門戸を開き多くの優秀な人材を集めていました。幕府は新たに安政五年（一八五八）外国奉行を作りました。翌六年六月神奈川奉行を設置し、神奈川は開港されました。

二 宗三の高い語学力

宗三は『蕃書調所職員録』（註④）にその名があります。それによると、安政四年（一八五七）六月六日まで、句読（くとう）教授（註⑤）で、同年十一月には教授手伝並出役に登用されています。文久元年（一八六一）六月には外国方に転役（註⑥）を命じられま

す。当時の事を書いた横浜開港資料館館報（註⑦）に、文久三年（一八六三）から慶応元年（一八六五）における南部弥八郎という薩摩藩探索方の報告には、『「横浜詰翻訳方」木村宗三、・・』という記述があります。外国方になってから、横浜で外国との書類等の翻訳をしていました。その後、宗三はパリ万博に行く直前の慶応二年（一八六六）には京都の四条大宮西入ル（現錦大宮町）の更雀寺（きょうしゃくじ）、昭和五十二年左京区静海市市原へ移転）で英語塾（註⑧）を開いていました。蕃書調所で英語を習得したのでしょう。その塾は宗三が蕃書調所で一緒だった友人の西周に託されました。蕃書調所の教授・教授手伝は当時一流の蘭学者がなりました。そしてその陣容は逐年補充強化されました。宗三は優秀な人材の一人として選ばれて指導スタッフに就いていたようです。仏国行きに選ばれたのは、仏語も当然できたからだと思われます。使節団は、仏国だけでなく英国・蘭国・独国も訪問する予定であり英語と仏語が出来ることは宗三の強みだったと推察します。宗三は蕃書調所で役に就き、幕臣になり、そして京都に移っています。宗三は渋沢栄一が歩んだように一橋の家臣になっていたと思われれます。

明治になってから宗三は仏語の翻訳本を三冊出版しています。『子供たちが読むべき理学の問答』（明治九年出版）、『婚姻新論初編』（明治十一年八月出版）、『続婚姻新論二篇』（明治十二年八月出版）です。

三 宗三の役職について

英語や仏語と同時に重要な事は、宗三は「大番格砲兵差図役頭取勤方改役兼勤」という身分で、「砲術の研究のために随行した」（註

②の九三頁、渋沢の回顧）ということになっています。

外国方として勤めてきた宗三が番方としての役目で随行するのは少し疑問に思う所もありました。当時軍事面の人材が不足していたことがその役職の理由の一つではないかと推察されます。それで幕府としては外国語も出来る者に軍事の勉強もさせる、となったものと思います。慶応三年十一月には正式な随員としての任を解かれ、サン・フェルデナン街十番で高松凌雲と暮らすようになり留学生として砲兵学（註⑨）を修めています。

マルセイユでの徳川昭武一行 慶応三年三月朔日（1867年4月5日）
後列左から4人目が木村宗三 左端は渋沢栄一（註②より）



徳川昭武遣仏使節団一行名簿

幕府使節 慶応三年一月十一日（一八六七年二月十五日）アル フェー号で横浜を出発、三年三月七日（一八六七年四月十一日） パリに到着	
氏名	身分役職
徳川昭武	將軍名代、清水家当主
向山一履	駐仏公使、勘定奉行格外国奉行
山高信離	昭武傳役、作事奉行格小姓頭取
保科俊太郎	歩兵頭並、留学生徒取締、横浜語学所出身
田辺太一	外国奉行支配組頭
日比野清作	外国奉行支配調役
杉浦愛蔵	外国奉行支配調役
生嶋孫太郎	外国奉行支配調役並出役
箕作貞一郎	儒者次席翻訳方頭取
山内六三郎	外国奉行支配通弁御用
木村宗三	大番格砲兵差図役頭取勤方改役兼勤
洪沢篤太夫	勘定格陸軍附調役
高松凌雲	御番格奥詰医師
山内文次郎	小十人格大砲差図役勤方、横浜語学所出身
菊池平八郎	水戸藩士、小姓頭取
井坂泉太郎	水戸藩士、小姓頭取
加治権三郎	水戸藩士、奥詰
皆川源吾	水戸藩士、奥詰
大井六郎左衛門	水戸藩士、奥詰
三輪端蔵	水戸藩士、奥詰
服部潤次郎	水戸藩士、奥詰
その他随行者	
横山主税	留学生、会津藩士
海老名郡次	留学生、会津藩士
尾崎俊蔵	留学生、唐津藩士
レオン・ディリー	駐日仏国長崎領事、医学博士

アレキサンダー・ シーボルト	駐日英国公使館付通訳
狩野政五郎	向山の従者
小管敏之進	山高の従者
綱吉	昭武付小者
喜作、喜六	外国方付小者
清水卯三郎	万博出品商人
兼吉	卯三郎手代

幕府先発者 慶応二年十二月十四日（一八六七年一月十九日） アゾフ号で品川沖発、慶応三年二月十九日（一八六七年三月二 十四日）パリ着	
氏名	身分役職
田中芳男	開成所物産学出役
北村元四郎	神奈川詰阿蘭陀通詞
中山七太郎	御普請役格御小人目付
塩島浅吉	外国奉行支配定役元締
良平、佐兵衛	小者
その他随行者	
二郎	卯三郎手代
六三郎、熊吉、善八	卯三郎手代
すみ、かね、さと	卯三郎雇いの江戸柳橋の芸者

幕府後発者 向山隼人正の後任の栗本安芸守一行 慶応三年六月十二日（一八六七年七月三十一日）横浜を出発 同年八月十一日（九月二十六日）マルセイユ着	
氏名	身分役職
栗本鯤	外国奉行
三田伊衛門	外国奉行支配組頭
石川岩司	外国奉行支配調役
坂戸小八郎	外国奉行支配調役並
熊谷次郎左衛門	陸軍奉行並支配

（註①の『徳川昭武幕末滞欧日記』
一八〇〜一八二頁より筆者抜粋して作成）

四 帰国後の宗三

大政奉還となり徳川幕府が終わると、宗三は一年半で帰国しました。帰国後、彼は榎本武揚に従って函館に行き敗戦、幽囚、釈放。明治四年九月十日兵部省七等出仕。これは明治政府の進める陸軍は旧幕府の仏国式を採用したため仏語を理解できる人材が不足していたためと思われます。同八年名称が変わった陸軍省職員録には「七等出仕木村宗三」とあります。

おわりに

危急存亡の時に幕府の求めと本人の志が一致したことで、優秀な幕臣や陪臣が集まり、日本がその危機を乗り切った例もあると思います。その中に木村宗三がいました。まだまだ資料不足ではありますが、分かった範囲の中で木村宗三について書かせていただきます。宗三については、山崎藩士であったことの実証をはじめどこに住み、どこで青年時代を送り、どこで学んだか、そして帰国後の社会的活躍など、今後情報が入れば、お伝えしたいと思います。

最後に今回、横井時成氏、鎌田裕明氏、竹内克司氏、片山昭悟氏、松戸市戸定歴史館名誉館長齊藤洋一氏など多くの方に情報、資料、アドバイスを頂きました。心よりお礼申し上げます。

【註】

- ①宮地正人「監修」『徳川昭武幕末滞欧日記』松戸市戸定歴史館発行一九九七年三月三十一日、「戸定（とじょう）歴史館」は松戸市にあり徳川昭武の遺品を中心とする松戸徳川家伝来品、徳川慶喜家伝来品、一八六七年パリ万国博覧会関係資料の展示を行っています。
- ②松戸市戸定歴史館編集発行『文明開化のあけぼのを見た男たち 慶応三年遣仏使節団の明治』一九九三年
- ③沼田次郎『洋学伝来の歴史』至文堂 昭和三十五年六月二十日
- ④国立国会図書館デジタルコレクション 勝海舟関係文書九二「御支配明細帳 蕃書調所職員録」コマ番号五五
- ⑤句読教授は初心者 of 学生の教授に当たる。教授手伝並出役は通常の講義と、外交文書の翻訳に当たる。発足当初は教授職二人、教授手伝七人、同年中に三人、その外数名の句読教授が任命された。学生は約千名の志願者から選抜され、三百四、五十名ばかりあったとも伝えている。③の『洋学伝来の歴史』百六〇頁、百六二頁
- ⑥国立国会図書館デジタルコレクション 『日本教育史資料七』文部大臣官房報告 課 明治二十五年六月二十二日出版 六六六丁十一行目
- ⑦吉良芳恵「南部弥一郎の謎」横浜市総務局横浜開港資料館館報『開港のひろば』第二六号 平成元年三月十五日発行 十一頁
- ⑧竹内力雄「山本覚馬覚書（5）「管見」を中心に」『同志社談叢』三四号二〇一四年三月一日 六六頁
- ⑨小林晶「高松凌雲（一八三六―一九一六）とフランス」『日本医学雑誌』第五十卷第一号 一一一頁上段十七行目

いじまでわかった木村宗三そうぞう

片山昭悟

はじめに

木村宗三という人は、江戸時代の終わり頃、慶応三年（一八六七）にフランスのパリ万国博覧会へ渋沢栄一とともに訪れています。

千葉県の松戸市戸定歴史館で一八六七年の「万国博覧会」の明治サムライたちの選択」という展覧会でのメモと備忘録で御雇として播磨山崎藩から随行していた木村宗三の書状写とあり、興味深い木村の博覧会見聞です。

フランス語と英語ができた播磨山崎藩出身の木村宗三も通訳方として同行していたことが確認されました。

令和三年（二〇二二）七月十一日（日）夜八時からNHK大河ドラマ「青天を衝け」二十二話「篤太夫パリに」を見られた方もあったと思います。今から一五四年前の江戸時代のことです。

なぜ木村宗三がフランスのパリに行ったのか大変興味があります。旅日記のことを僚友に話されています。

また、当時のことについての史料の紹介やその後の木村と高松凌雲とのこと、フランスに行つてパリ万博使節団一行の集合写真は、渋沢栄一と高松とともに写っており、木村本人のパリで写したガラス写真もあり、木村宗三より差越書状（旅日記）数通ノ写しを、播磨山崎藩主本多肥後守（八代本多忠鄰公）の留守居方書役が書き写していることは、特筆すべき点であり山崎藩との深い関係を示して

いる貴重な史料であることが窺えます。

なお、山崎の地において調査したところ本多家に伝わる史料には残念ながら記載がなく、木村が江戸詰であったという関係資料も不明瞭な点も多く詳細なことはわかりませんでした。今回木村宗三について特集をします。

公益財団法人山崎本多藩記念館元代表理事横井時成先生、大雲寺住職加藤昭彦氏、竹内克司氏、高井淳氏より貴重な史料をご提供と詳しくご教示をいただきました。厚く御礼を申し上げます。



写真は木村宗三（フランスのパリにて）
木村宗三 Kimura 直筆のサイン
国立国会図書館デジタルコレクション

千葉県松戸市戸定歴史館の展覧会メモと備忘録

木村宗三を中心にして

はじめに

一八六七年の万国博使節団の明治サムライたちの選択という展覧会のメモと備忘録で、千葉県の松戸市戸定歴史館において二〇一九年十月十二日から十二月二十二日まで開かれた展覧会の内容である。

万国博使節団の概要

慶応年の徳川昭武渡欧ならびに仏国万博と関係国巡歴に際し、昭武の傅育役として随行し、帰国後は美術行政（「日本画」再編成期の旧派側として）を牽引した山高信離を中心に、渡欧使節団の実態と活動にフォーカスした展示をしている。

必ずしも帰国後の動向を詳らかにするものではなく、フランスあるいは晩年の昭武と旧幕臣の交流を叙述する内容である。

同館の所蔵になる山高信離関係文書および菊池平八郎ら幕臣の文書などが豊富に盛り込まれている。

木村は外国使節団のなかで渋沢栄一や菊池らと共に傅育役として渡航し、外国方として実務・西洋窮理の見聞集積を務めた。（中略）

この年のパリ万博では、薩摩・肥前の両藩が使節団の田辺をだます形で、独立国扱いで出展し、また美術の面では高橋由一、宮本元通ら開成所「画学」および「絵図調」の面々の油絵がサロンの展示のように展示室に掲げられているなど、時代の過渡期の様相を呈していたが、今回の博覧会では幕臣・陪臣たちがどのように万博

をみていたかも資料から辿ることができる。

御雇として播磨山崎藩から随行していた木村宗三の書状写では、「日本より押絵之額相渡り、茶見世の様の形二造り候処、婦人

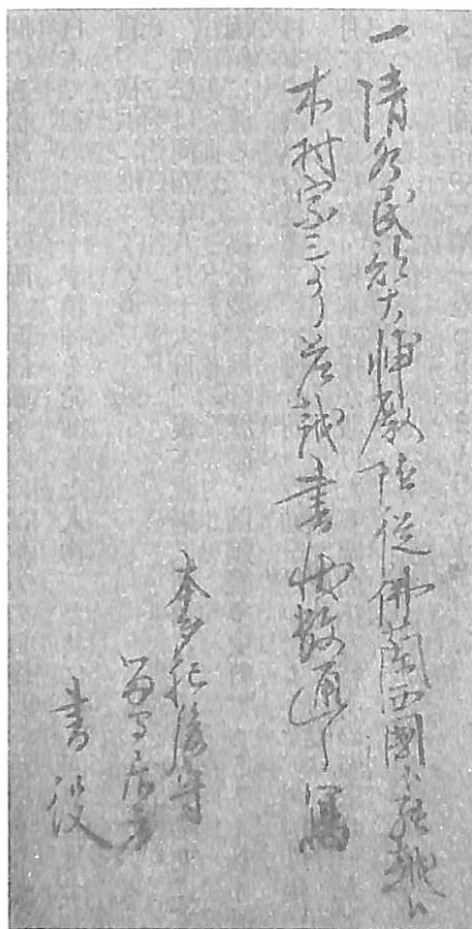
見学沢山に有り」（「清水民部大輔殿随従仏蘭西に罷越候 木村宗三より差越書状数通之写」とあり、「押絵」が展示されていたことがわかる。出品目録に「押絵」なるものではなく、立体的に見える絵として木村が油絵を捉えていたとの可能性もあり、興味深い。

茶見世に「押絵」が「柳橋芸者」とともに「展示」されたのか。また、別の話題を一文に木村が組み込んだのか、詳らかでないが、明治七八年に五姓田親子が奥山で行った油絵の展示のさきがけになるのか、あるいは寛政期に流行した観覧客に茶を供する「花鳥茶屋」に絵画の展示を組み合わせたものなのか、いずれにしても示唆的であり、興味深い木村の博覧会見聞である。

*播磨山崎藩木村宗三のパリ万博での様子がよくわかる貴重な資料でありほぼ原文のまま紹介させていただきました。

木村宗三より差越書状数通ノ写しについて

木村宗三より差越書状数通ノ写しを、本多肥後守留守居方書役が書き写しているので今回紹介させていただきます。



(千葉県松戸市戸定歴史館所蔵)

清水民部大輔殿随従仏蘭西國に罷越候
木村宗三より差越書状数通ノ寫

本多肥後守

留守居方

書役



写真の説明

パリ万国博覧会(1867年)

日本の派遣団

Stans·katz·l·Engraving from

photograph·1867 Le Monde

Illustrre·2 Mitsui Group [1]

パリ万博幕府使節一行。後列左が栄一。

まだ髷を結っている(渋沢史料館所蔵)

写真は後列左から洪沢栄一・山内文次郎・高松凌雲・木村宗三

山本覺馬覚え書(五)「管見」にみる木村宗三について

京での木村宗三(宗蔵、壮三、宗三郎と記されたりする)の英語塾が、慶応三年のパリ万国博覧会に列席することになった徳川昭武(当時、十四歳)に、木村が随行する事となり、急拠、閉鎖となり、その塾生を、開成所の朋友の木村から西が託されたのが始まりである。(『西家略譜』『西周全集』三 p757、760「史料」)。

木村は幕臣(後、一橋家々臣)で英語を学び(『日本教育史資料』七)洋学の項に「文久元年(一八六一)六月廿一日木村宗三外国方ニ転ス」とある)、パリ遊学中、戊辰戦争勃発の報に接し、随行仲間の高松凌雲(医師、函館戦争時には敵方の負傷兵の治療もなし、日本で初めて赤十字精神を発揮した人物)と共に慶応四年五月十七日、横浜に帰っている。

高松は同四年八月十六日、榎本武揚に同調し、軍艦・開陽丸にて函館に渡る(『高松凌雲翁経歴談・函館戦争史料』p57、64続日本史籍協会叢書)。木村も同一行動をとったようで、明治二年一月に蝦夷島総裁・榎本武揚が設けた室蘭開拓奉行所の頭取の一人となっている。(『旧幕府』No.6 大島圭介「南柯紀行」p15。『新室蘭市史』第一巻 p553、554)。

開拓奉行は沢太郎左衛門で、沢は慶応四年一月六日、徳川慶喜や松平容保らが大阪から江戸へ脱出した時、館長・榎本を逢坂に置き去りにして出帆した開陽丸の副館長。

木村は函館戦争後、幽囚、釈放。その後は、明治二十二年八月六日付(十日認可)の「私立暁星学校」の東京府への私立学校設立願

によれば、外国人による学校設立は不可なので、代わっての日本人四人の設立者の筆頭人となっている。

「東京府下赤坂区青山南町二丁目六十三番地／東京府士族／木村宗三／天保二年十二月廿四日生

一明治四年九月十日兵部省七等出仕被仰付同八年／(明治五年二月陸・海軍省に分離)五月十三日被免同十八年七月廿七日赤坂区学務委員被仰付又同区々々議員ノ任ニアリ／賞罰及私訴ニ関係無之候／明治二十一年八月六日右木村宗三□印」とある。(『暁星百年史』p24、28)。「赤坂区史」赤坂区役所 昭和十六年によれば明治十二年二月には区会議員に選出されている)。

参考文献 竹内力雄「同志社談叢」三十四号 二〇一四 同志社大学同志社社史資料センター

木村宗三について(解説)

慶応三年のパリ万国博覧会に列席することになった徳川昭武(十四歳)に、木村が随行することになり、木村は高松凌雲(医師、日本で初めて赤十字精神を発揮した人物)と共に慶応四年五月十七日、横浜に帰っている。同四年八月十六日に榎本武揚に同調し函館に渡り、高松と木村は同一の行動をとったようで、明治二年一月に榎本武揚が設けた室蘭開拓奉行所の頭取の一人となっているようです。

明治二十二年八月六日付の「私立暁星学校」の東京府への私立学校設立者の筆頭人となっている。東京府下赤坂区青山南町二丁目六十三番地／東京府士族／木村宗三／天保二年十二月廿四日生で、その後のことがわかる貴重な資料です。

「高松凌雲とフランス」による

木村宗三と高松とのことを中心に

「高松凌雲は慶応三年（一八六七）パリで開催された万国博覧会に幕府派遣使節団の一員として参加している。

高松凌雲は幕府の奥詰医師であり、使節団の健康を管理することとフランスの医学を見聞しようと思っていた。

横浜を出て四十八日目の四月三日にマルセーユに到着して十一日にパリに着いてル・グラントテル・ド・パリで一夜を過ごした。徳川昭武に随行して公式行事に出席したが、テレビでも渋沢栄一が交渉して経済的理由でペルゴレーズ街五三番地に移動している。

凌雲は使節団のヨーロッパに歴訪に約二か月半随行している。途中パリに一旦帰着して十一月十八日に正式な任を解かれてサン・フェルディナイン街十番地で木村宗三（砲術勉強のため随行）と二人で暮らすようになる。

・徳川昭武のイギリス訪問に同行することになる。

・木村宗三と高松凌雲とは写真は隣である。

後年書かれた「刀圭新報」（明治四四年）、「高松凌雲翁経歴談」

（明治四五）には「（慶応三年十月）二十四日（一八六七年一月一八日）、一行巴里ニ帰着シテ、既ニ欧州巡回ノ事ハ終ハリタレバ、予ハ公子ノ付属ヲ解カル因テ、木村宗三ト共ニ下宿ヲ求メテ専ラ医学ニ従事スル事トハ成リタリ、木村は砲兵学ヲ修ム、予ハ「ホテルヂユム」ト云ウ病院ニ通学ス、宿所ニハ毎日二時間教師ヲ雇フテ語学ヲ勉強シタリ、予ガ尤モ大得意な時ナリシ」と記載されている。

まとめ

- ・木村宗三のことが記載されていること。
- ・高松凌雲と下宿を共にしていること。
- ・仲がよかつたのではないか。
- ・写真も木村の左隣にいたことから窺える
- ・「サン・フェルディナイン街十番地で木村宗三（砲術勉強のため随行）と二人で暮らすようになる。」
- ・「木村宗三ト共ニ下宿ヲ求メテ専ラ医学ニ従事スル事トハ成リタリ、木村は砲兵学ヲ修ム、」

木村宗三のことが記載されている貴重な資料なので、今回紹介させていたいただいた。

参考文献

「高松凌雲とフランス」小林 晶

『日本医学雑誌』第五〇巻第一号（二〇〇四）一一〇ページ
高松凌雲（一八三六～一九一六）

幕末期における西周の憲法理論に

みえる木村宗三について

一二月二〇日、徳川昭武に対して、將軍徳川慶喜（同月五日將軍職を継ぐ）の名代として、パリ万国博覧会への使節として派遣されるとの命が下ったが、西は昭武の早速の招きに応じて、「西洋ノ風習」や「航海ノ利害」などについて説明を行い、また、昭武の随行者となった旧友・木村宗三からは、京都で開いていた洋学塾を託されたことから、西がその洋学塾を引き継ぐことになった。

こうしてこの年が暮れ、慶応三年の新年を迎えたが、この新春の漢詩によせて西は將軍慶喜を、堯舜（中国古代の聖天子）を模範とする明君に育て上げようという決意を示した。かつて安政四年十月、慶喜に対して北海道開拓の関する建議書を提出して、開拓の重任を引き受けるべき人物として期待したのであったが、それは実現せず、いまや次第に慶喜を身近な存在として意識することができるようになって、西はそのために努力しようとの意思を漢詩をもって表わしたのであるが、この年は、やがて慶喜の近くに侍して、フランス語を教え、また種々献策などを行うこととなる。

参考文献 松岡八郎「幕末期における西周の憲法理論」『東洋法学』三十三巻一号 一九八九・十二より

徳川昭武の随行者となった旧友の木村宗三から京都で開いていた洋学塾を西周に託されたことから、洋学塾を引き継ぐことになった。洋学塾とはフランス語を教える塾である。このことから木村宗三

は、フランス語ができたことがわかる資料であり、今回紹介させていただいた。

東本願寺翻訳局目録に見える木村宗三訳「耶蘇伝」によると、明治初年の東本願寺に翻訳局があり、その中に木村宗三訳「耶蘇伝」が存在するが、これがルナンのフランス語原文からの翻訳であるか、それとも英語訳からの重訳であるかということ。中扉には耶蘇伝乾（坤）木村宗三訳とある。

一八六三年巴里ニ於テ此書ヲ著ス 日本東京 木村宗三翻訳
末尾に 耶蘇伝 仏国僧侶学校教師ノ列タル「エルンストラロナ」氏 一八六三年巴里ニ於テ此書ヲ著ス 日本東京 木村宗三翻訳と書かれている。

「横浜開港資料館報」第二十六号によると、木村宗三「通詞（つうやく）」として、福沢諭吉「外国奉行手付通詞」とともに知られていることがわかる貴重な資料であり紹介させていただいた。

会員・家族の文芸

◎俳句

山越えの汽笛のとどく良夜かな
露の世は露の世ながら九十年
新樹光メタセコイヤの並木道
願い事言ふ間もなしに星流る
やわらかに月あかりして背戸の畑
新米を磨ぎて安どの夕餉かな
師の句碑を詣へばほっこり春兆
春宵を守り口遊む昭和うた
水澄めり疎水に雑魚のすばしかり
垣根からのぞく茶の花旧家跡
食進む間引きなの色やわらかき
魂は星のかたち夕月夜
蟻地獄三つ並びて静かなり
古池の病葉浮かべ暮れかかる
菩提寺の法座に出会う秋彼岸
母の遺影に新米の香を供え
祭祭と宇宙の果ての冬銀河
干し大根今も昔も口達者
白い中真つ白選ぶ冬薔薇
妻と母の距離感微妙柿をむく

京屋 伊助
京屋 伊助
京屋 伊助
杉山美保子
杉山美保子
高井 麗子
高井 麗子
高井 麗子
田中 良子
田中 良子
田中 良子
鳥羽チエノ
鳥羽チエノ
三浦 ゆき
三浦 ゆき
里見 和樽
里見 和樽
高井 智代
高井 智代
高井 智代
速水美知代
速水美知代
速水美知代
宗平 圭司
宗平 圭司
宗平 圭司

◎冠句 (つた・いさわ・加生・山崎冠句会)

緑さす 鷺の白さが田に映える
秋祭り ふる里恋し遠き空
緑さす 水面に写し夏を呼ぶ
秋祭り 三密避けて神事のみ
緑さす 我がふるさと山清く
秋祭り 今年も聞けぬ笛太鼓
緑さす 畑仕事の手を止めて
秋祭り 稲穂は実り餅供え
緑さす あじさいの花梅雨空に
秋祭り 新型コロナ宮淋し
緑さす ホーケキョケチヨと幼な鳴き
秋祭り コロナで今年も神事のみ
緑さす 若葉の影は人も染め
秋祭り 村の縁日懐かしく
緑さす 木々の生命溢れ出す
秋祭り 鼻腔くすぐる屋台ずらり
緑さす 田園歩く雨上がり
秋祭り 輝く稲穂背に受けて
緑さす 夏の日差しに照らされて
秋祭り 夜に人が多くなる
緑さす 朝の紫陽花際だつて
秋祭り 獅子習う子ら頼もしく
緑さす 山を見ながら畑仕事
秋祭り 屋台を追ってドンドンと

宇田 幸夫
宇田 幸夫
坂本 忠彦
坂本 忠彦
実友 勉
実友 勉
嶋津 千里
嶋津 千里
為国真佐行
為国真佐行
谷笹 まや
谷笹 まや
高井 玲依
高井 玲依
西家 侑希
西家 侑希
三木ひづる
三木ひづる
飯塚 正浩
飯塚 正浩
大谷 志路
大谷 志路
中瀬 公三
中瀬 公三
中瀬 公三

*次号に掲載する文芸作品の投稿をお待ちしています
併せて新会員を募集しています

事務局だより

編集後記

令和四年度の通常総会について

記

日時 令和四年四月十七日(日) 午後二時より

場所 宏粟防災センター四階研修室

議事 一、令和三年度事業報告について

二、令和三年度会計報告について

令和三年度監査報告

三、令和四年度事業計画について

四、令和四年度会計予算について

総会終了後、記念講座として、「播磨国風土記」を鑑賞します。

『山崎郷土会報 第一三八号』をお届けします。

新型コロナウイルスも二回のワクチン予防接種で一度は解除になりましたが、今年になりオミクロン株が急拡大しています。三月には三回目のワクチン予防接種が予定されています。

第一三八号ができるかどうか心配していましたが、皆様のご協力によりいずれも心に響く力作が集まりました。

大谷司郎会長は、安田清風と山崎(一)について、歌人で、県立山崎高等女学校で教師をされていた安田清風(喜一郎)先生について、伊藤一郎副会長は、山崎の美術の流れ(四) 蒔絵の第一人者武野金霞氏について、竹内克司さんは、三木露風 露風と母かたのこ②について、それから令和三年の七月十一日(日)にNHK大河ドラマ「青天を衝(つ)け」二十二話「篤太夫パリ」を見られた方もあったと思います。

今から一五五年前の江戸時代の幕末の慶応三年(一八六七)にパリの万国博覧会に渋沢栄一とともに播磨山崎藩士の木村宗三も同行していたことから今回特集で詳しく紹介しています。

高井淳さんは木村宗三の幕末から維新の活躍について、私はここまでわかった木村宗三です。千葉県松戸市の戸定歴史館の展示や多くの文献にも木村宗三のことが紹介されていました。

山崎郷土会報はこれからも皆様の声を届けるようにしたいと思います。ます。

今年が寅年で、「虎は千里往って千里還る」と言われています。会員の皆様にとって良い年でありますように祈願します。

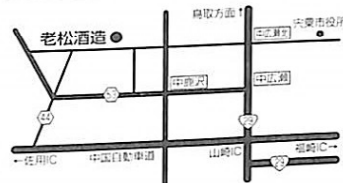
老松酒造有限公司

■老松ダイニング
発酵と麹の健康ランチ
定休日:木曜日(予約優先)

■老松販売所
日本酒・リキュール・麹商品

老松酒蔵見学出来ます

〒671-2577
宍粟市山崎町山崎12
電話0790-62-2345



まごころを伝えます。

地酒

山陽
盃

確かな品質と味わい。

SANYOHAI
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎28

一献献上 品質本位
一播
献州

TEL.0790(62)1010 FAX0790(62)6218

E-mail info@sanyouhai.com HP http://www.sanyouhai.com

- 相続手続時、名義変更に関するアドバイス
- 各種税務手続き
相続税・贈与税確定申告手続 電子申告環境サポート
所得税確定申告
- 経理自計化のお手伝い
- 法人税・地方税・申告書作成代行
- 経営助言

〒671-2533 兵庫県宍粟市山崎町須賀澤1329-7

高橋利典税理士事務所

税理士・行政書士 高橋利典
TEL (0790) 63-2150 / FAX (0790) 63-0445



パンフレット・デザイン広告
名刺・封筒・伝票・新聞広報誌
ポスター・案内状・シール等

(有) 稲田印刷

〒671-2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL (0790) 62-0254 FAX (0790) 62-4764

外科・内科

山中医院

院長 山中潤一

山崎町西町・TEL 0790-62-0036

ほっと、ひといき

伊沢の里

- 各種宴会 祝い、法要、同窓会(送迎バス有り)
- 宿泊 観光、ビジネス 帰省
- 日帰り入浴 花風呂、露天風呂、サウナ
- レストラン 御膳、定食、麺類、丼物

兵庫県宍粟市山崎町生谷214-1
TEL.0790-63-1380 FAX.0790-63-0362
URL:www.isawanosato.com E-mail:info@isawanosato.com

PHOTO-STUDIO
Ueyama
P.C.S
スタジオウエヤマ

●山崎店 兵庫県宍粟市山崎町山田204
TEL (0790) 62-8027
FAX (0790) 62-8827

株式会社 安井書店

兵庫県宍粟市山崎町山崎90 〒671-2577
TEL (0790) 62-0700(代) FAX (0790) 62-0700

E-mail:gaisyo@yasuisyoten.co.jp
URL:http://www.yasuisyoten.co.jp/